古事記神話の再話作品のテキストについて　その３

―天地初発・黄泉の国訪問神話の場合―

原　田　留　美

Study of depiction of rewritten works of Kojiki myth 3
— In the case of Tenchisyohatu・Yominokunihoumon —

Rumi Harada

要旨：

本稿の目的は、絵本『黄泉のくに』と古事記のテキスト内容を比較することで、『黄泉のくに』の特徴を明らかにすることである。考察の結果、多くの神名を列挙した部分や、性的な要素、現代では差別的と受け取られる要素については省略もしくは簡略化されており、子殺しの場面等も具体的には描かれていないことがわかった。一方、物語の山場と深く関わる、黄泉国やその住人の様子には、具体的にわかりやすく描かれている。また、三貴子の誕生には触れないことで、単独の物語としての完結性が高められている等のことが確認された。全般として、より幼い子ども、未就学児にもわかりやすい工夫や配慮が随所に見られる作品といえるものと考える。

キーワード：

古事記　再話　天地初発　黄泉国訪問神話

Ⅰ．目的と方法

前稿、前々稿において[1)]、古事記を児童向けに再話した作品（『絵物語古事記』、『こんなにおもしろい日本の神話(1) 天地の始まり編 アマテラス』）ならびに絵本（『国生みのはなし～イザナキとイザナミ～』）のテキストに着目し、各作品において黄泉の国訪問神話がどのように再話されているか、考えてみた[2)]。本稿では、これらの考察を踏まえつつ、絵本『黄泉のくに』（谷真介の再話による。以下、谷版と呼ぶ。）のテキストについて、子どもとってのわかりやすさへの配慮がどのようになっているかを考えることを目的とする[3)]。

この研究においては、古事記神話の内容と比較することを通して当該作品の特徴を見ていくこととする。当該作品はこれまで見てきた諸作品よりも、再話の工夫がより多く認められるため、原典の古事記との違いに着目することによりその特徴が明らかになると考えるためである。

なお本研究は、原典の古事記との違いの多寡や、違いの程度をもって、絵本作品の善し悪しを量ることを意図とするものではない。幼い子どもに向けて古事記神話を提示する際に、どのような工夫がなされているかを明らかにすることに主眼があることを、あらかじめことわっておく。

Ⅱ．黄泉国訪問神話と『黄泉のくに』について

絵本『黄泉のくに』のもととなった物語、黄泉国訪問神話は古事記上巻にある。国生み神生みの途中で焼死した妻イザナミを迎えに行くため、夫のイザナキが黄泉国に赴く話で、その前の話、イザナミ焼死までのいきさつを伝える天地の成立と国土創成の神話との関わりが深い。また、日本の神話の中で重要とされる三神（三貴子。アマテラスオホミカミ、ツクヨミノミコト、スサノヲノミコト）誕生につながるものでもある。黄泉国訪問神話は、古事記において、世界の成立を語る神話に含まれている話である。

黄泉国訪問神話は、妻の連れ戻しに失敗したイザナキが、黄泉国の住人たちに追いかけられるスリリングな場面が印象に残るためか、子ども向けの書籍に採られることも少なくない。現在書店等で購入しやすい絵本としては、次の三点がある。

『くにのはじまり』（舟崎克彦文　赤羽末吉絵　あかね書房　1995年）。「日本の神話」シリーズの第1巻。ただし、トモ企画より1987年刊行されたものの再刊。

『黄泉のくに』（谷真介文　赤坂三好絵　ポプラ社　2003年）。「日本の物語絵本」シリーズの4。

『国生みのはなし～イザナキとイザナミ～』（荻原規子文　斉藤隆夫絵　三浦佑之監修　小学館　2016年）。「日本の神話古事記えほんシリーズ」の【一】

以上三作品はいずれも、天地の成立と国土創成からイザナキの黄泉国訪問・地上世界への帰還までをとりあげているが、題名にも現れているように、谷版は黄泉国訪問の部分に中心が置かれている再話となっている。天地の成立と国土創成の部分は簡略化されており、三貴子誕生については触れられていない。しかし、その簡略化された部分の記述の仕方、また、三貴子誕生に触れずに物語を閉じている部分などには、谷版独自の工夫がうかがえると考える。

さらに、天地の成立と国土創成から黄泉国訪問にかけての古事記の神話には、子ども向けに再話する場合には扱いに工夫を必要とする箇所が複数ある。古事記の当該部分の物語の流れについては、表1にまとめたのでそれを参照されたいが、その中から、再話の際に工夫が必要な部分を整理すると次のようになると考える。

① 天地の始まり以降の神代七世まで、多くの神々の名が列挙されている部分。二神に天神が国作りを命じる所も含む。

② イザナキとイザナミが、交合により国土をうみだすことにする部分。

③ 婚姻の際にイザナミが先に声をかけたことを、よくないとする部分。

④ 最初に生まれた子（ヒルコ）と次に生まれた子（淡島）を、子どものうちに入らないとし、流す部分。

⑤ 国生みがうまくいかないため、天つ神に指示を仰いだところ「女が先に声をかけたので良くない」と言われた部分。

⑥ 再度地上に降りたイザナキ・イザナミが生み出した多くの国や神の名が列挙されている部分。

⑦ 火神を生んだイザナミがやけどを負い、病み伏す部分。

⑧ やけどに苦しむイザナミの排泄物等から生まれた複数の神々の名が列挙されている部分。

⑨ 妻を失ったイザナキの涙から、神々が生まれた部分。

⑩ イザナミの死の原因となった火神の首を

イザナキが切って殺す部分。

⑪　殺された火神から生まれた複数の神々や、その際に使われた刀の神の名が列挙されている部分。

⑫　黄泉国でのイザナミの姿が、ウジ虫に集られ、雷神が生じるなど変わり果てた姿であったとする部分。

⑬　イザナミの遺骸から生まれた雷神の名が列挙されている部分。

⑭　桃の実にイザナキが名をつける部分。

⑮　イザナミの別名や千引の石の名についての部分

⑯　黄泉国から地上世界に戻ったイザナキがみそぎをした際に生まれた神々の名が列挙されている部分。

以上を子ども向け再話の際に工夫が必要な箇所の主なものと考えるが、これらを便宜上、次のように分類整理した。

A　多くの神々の名が上げられている箇所。①⑥⑧⑨⑪⑬⑭⑮⑯

B　性的な要素が含まれている箇所。②

C　現代の価値観に照らすと差別的と受け取れる箇所。③④⑤

D　苦しみや死の様子が生々しい箇所。⑦⑫

E　残酷な要素が認められる箇所。⑩

これらの要配慮部分に関し、谷版ではどのように扱われているか、また、子ども読者への配慮が認められるその他の箇所について見ていくことで、谷版の特徴が見えてくるものと予想する。

以上の点について、本稿では整理し考えていくこととするが、そのために作成した古事記と谷版の内容の対照表を以下にあげておく。以降の分析は、この表に沿って進めていくこととしたい。表中のA－①等は、上記の分類を記したものである。古事記の内容に関しては、主として新編古典文学全集版の『古事記』を参考にしている[4)]。なお、古事記と谷版の神名表記には違いがあるが、引用部分等書き分けが必要な箇所以外は便宜上、伊邪那岐命・イザナギノミコトはイザナキ、伊邪那美命・イザナミノミコトはイザナミと表記することを原則とする。

表１　古事記と谷版の内容の対照表

※「谷版の特徴」欄の空白箇所は、ほぼ古事記の内容と共通する部分である。（読み易さのため、古事記の神名はカタカナ中心の表記とする）

古事記の内容のまとめ	谷版の特徴
天地の始まりに、高天原にアメノミナカヌシノ神、タカミムスヒノ神、カムムスヒノ神が成った。A－①	アメノミナカヌシノカミのみ登場。A－①
地上の世界がわかく、浮いた脂のようで、クラゲのように漂っていたとき、	
葦の芽ぶきのごとき勢いで成った神は、ウマシアシカビヒコヂノ神、アメノトコタチノ神。 以上五神は、別天つ神（ことあまつかみ）。A－① 次に、クニノトコタチノ神、トヨクモノノ神が成った。 次に成ったのは、ウヒヂニノ神、妹スヒチニノ神、ツノグヒノ神、妹イクグヒノ神、オホトノヂノ神、妹オホトノベノ神、オモダルノ神、妹アヤカシコネノ神、イザナキノ神、妹イザナミノ神。	イザナギノミコト・イザナミノミコトのみ登場。ウマシアシカビヒコヂノ神、アメノトコタチノ神の生成時の描写を二神のそれに転用。A－①

クニノトコタチノ神からイザナミノ神までを、神世七代（かむよななよ）という。A－①	
天つ神一同が、イザナキノ命とイザナミノ命に「漂っている地上世界を国土として整え固めよ」と、天の沼矛を与えて命じた。	アメノミナカヌシノカミが国作りを命じている。A－①
二神は天の浮橋から沼矛を下ろして潮をかき回し、引き上げたときに矛の先からしたたった潮が積もって島となった。これがオノゴロ島である。	オノゴロ島の名称記述はなし。
二神はその島に降り、天の御柱と八尋殿を見立てた。 イザナキノ命が妻イザナミノ命に「あなたの体はどのように成っているか」と尋ねると、「私の体には成り合わないところがあります」と答えた。そこでイザナキノ命が、「私の体には成り余っているところがある。二人の成り合わないところと成り余っているところで国土を生み成そうと思うがどうか」と言うと、イザナミノ命が賛成する。B－②	天の御柱と八尋殿はなし。 性的な要素はなし。B－②
イザナキノ命は「天の御柱を巡ってから結婚しよう。あなたは右から廻れ、私は左から廻ろう」と言う。約束の通りに巡ると、イザナミノ命が先に「いとしい男」と言い、後からイザナキノ命が「いとしい女」と言う。夫は妻に、「女から先に言うのは良くなかった」と言った。C－③ しかしそのまま結婚し、生まれた子はヒルコだった。この子は葦舟に乗せて流した。次に淡島を生んだが、これも子どもの数には入れない。C－④ 二神は相談し、「今生んだ子は良くない。天つ神に報告しよう」と言って天に上って指示を求めた。天つ神は占いをして「女が先に声をかけたので良くない。もう一度降って言い直しなさい」と告げた。C－⑤	男性優位の要素なし。C－③　C－⑤ 生まれた子どもを流す要素はなし。C－④
そこで二神は地上に降りて天の御柱を巡った。そしてイザナキノ命が先に声かけをして結婚し、淡路島と四国を生んだ。次に隠岐島、九州、壱岐島、対馬、佐渡島、本州を生んだ。これらは大八島国と言う。（神名列挙在り） 吉備児島、小豆島、大島、女島、知訶島、両児島を生んだ。（神名列挙在り） 国生みが終わった後は神を生んだ。 最初にオホコトオシヲノ神などを生み、海の神、ミナトの神を生んだ。 ミナトの神二神は水の神々を生んだ。（神名列挙在り） 次に、風の神、木の神、山の神、野の神を生んだ。山の神と野の神は、山野の神々を生んだ。（神名列挙あり） 次に船の神、オホゲツヒメの神、火の神ヒノカグツチノ神を生んだ。（神名列挙在り）	神名の列挙なし。A－⑥
カグツチノ神を生んだため、イザナミノ命は陰部を焼かれて病みついた。嘔吐物や排泄物から神々が生まれたが、イザナミノ神は亡くなった。（神名列挙在り）	簡潔な表現。D－⑦ A－⑧
二神は十四の島と三十五柱の神を生んだ。	記述なし

イザナキノ命は、いとしい妻が一人の子と引き換えに亡くなったことを嘆き、イザナミノ神の床の頭の方から足の方まで腹ばいで這って泣いた。	
その時に泣くことの神が生まれた。（神名あり）	神名なし。A－⑨
亡くなったイザナミノ神は、出雲の国と伯伎の国の境の比婆之山に葬った。	記述なし
イザナキノ命は、十拳の剣でカグツチノ神の首を切った。	簡略な描写。E－⑩
刀の血から、水や雷などの神が成った。これらの神々は、刀から成った神である。 殺されたカグツチノ神の体から、山の神々が成った。 刀の名はアメノオハバリと言う。（神名列挙在り）	なし。A－⑪
イザナキノ命は、イザナミノ命に会いたいと思い、黄泉国に追いかけて行った。	黄泉国への道中の情景描写あり。
イザナミノ命が、御殿の戸を閉ざして出迎えた時にイザナキノ命は「いとしい妻よ、あなたと私が作った国はまだできあがっていない。だから一緒に帰って欲しい」と言った。	戸の隙間から顔だけを出す。
イザナミノ命は「悔しい、あなたが早く来てくれないから、私はヨモツヘグヒをしてしまった。けれども、いとしいあなたがこの国まで来てくださったことは恐れ多いので、帰ろうと思う。ヨモツ神と相談しよう。その間、私の姿を見てはいけません」と言って、御殿の中にもどっていった間が、大層長くて待ちきれなかった。	
そこでイザナキノ命は左のみずらにさしたユツツマグシの太い歯を一本折り、火を灯して御殿の中に入って見たところ、	遺骸の腐乱状態や虫への言及あり。 雷神の描写在り。D－⑫ 神名無し。A－⑬
イザナミノ命のからだにはウジ虫が集ってころころとうごめいており、頭にはオホイカヅチ、胸にはホノイカヅチ、腹にはクロイカヅチ、陰部にはサクイカヅチ、左手にはワカイカヅチ、右手にはツチイカヅチ、左足にはナルイカヅチ、右足にはフスイカヅチ、併せて八種の雷の神が成っていた。	
イザナキノ命は見て恐ろしくなり逃げ還るが、イザナミノ命は「私に恥をかかせた」と言って、ヨモツシコメにイザナキノ命の後を追わせた。	イザナミノミコトの命令の言葉あり。
イザナキノ命が黒い御縵を取って投げすてると、ヤマブドウの実がなった。ヨモツシコメたちがこれを拾って食べている間に逃げていったが、食べ終わるとヨモツシコメたちはイザナキノ命をまた追いかけた。 右のみづらに刺していたユツツマグシの歯を折って投げすてると、たちまちタケノコがなった。ヨモツシコメたちがこれを抜いて食べる間に逃	ヨモツシコメがヤマブドウやタケノコをむさぼる描写在り。

げていった。	
イザナミノ命は、八種の雷神に黄泉の大軍をつけて追わせた。	イザナミノミコトの命令の言葉あり。
イザナキノ命は、帯びていた十拳の剣を抜いて後ろ手に振りながら逃げた。	イザナギノミコトは追っ手に追いつかれ、刀を物理的にふるって退ける。
黄泉つひら坂のふもとにたどり着いたとき、そこの生えていた桃の木の実を三つとって反撃したところ、黄泉の大軍はすべて坂を逃げもどった。	
イザナキノ命は、桃の実に「私を助けたように、葦原中国のすべての人々が、苦しい目に遭って悩む時には、そのものたちを助けなさい」と告げ、オホカムヅミノ命という名を授けた。A－⑭	授けた神名はオオカムズミノミコト。A－⑭
最後に、妻イザナミノ命が自ら追いかけてきた。	追いかけるイザナミノミコトの描写あり。
そこでイザナキノ命が千引きの岩で黄泉つひら坂を塞ぎ、その岩を挟んで二神が向き合って別れを言いわたす時に、イザナミノ命が「いとしい夫、このようにするのなら、あなたの国の人々を一日に千人縊り殺そう」といった。イザナキノ命は「いとしい妻、あなたがそうするのなら、私は一日に千五百人生まれるようにしよう」と言った。	二神のやりとりの後に「イザナミノコミトのへんじは、ありませんでした。」
これにより、この世では、一日千人が死に、一日千五百人生まれるのである。	記述なし。
イザナミノ神の命をヨモツオホカミと呼ぶ。A－⑮ 黄泉坂を塞いだ岩は、チガヘシノ大神と名付けられた。A－⑮ 今、黄泉つひら坂は、出雲国のイフヤ坂だという。	神名なし。A－⑮ 神名なし。A－⑮ 地名なし。
イザナキノ大神は、「醜い、汚れた国に行ったものだ。みそぎをしよう」と言い、筑紫の日向の橘の小門のあはき原でみそぎをした。その時に投げすてた身につけていたものから十二の神が成った。（神名列挙在り）A－⑯	地名あり。 神々の出現はなし。A－⑯
ここで「上の瀬は流れが速く、下の瀬は流れが弱い。」と言って、中の瀬の水に入って体をすすいだときに、汚れの神々、汚れをなおす神々、海の神々が成った。（神名列挙在り）A－⑯	なし。A－⑯
そして左目を洗ったときにアマテラス大御神、右目を洗ったときにツクヨミノ神、鼻を洗ったときにタケハヤスサノヲノ命が成った。	なし。

Ⅲ．子ども読者への配慮工夫が必要と考えられる箇所について

ここでは、上記にて５分類した、子ども読者への配慮工夫が必要と考える箇所が谷版ではどのようになっているか確認していく。

(1) 多くの神々の名が上げられている箇所について

表１のＡ－①⑥⑧⑨⑪⑬⑭⑮⑯の箇所がこれに相当する。⑭⑮は、多数の神名が列挙されている部分ではないが、子どもにとっては聞き慣れない神名が見えるため、ここに入れることとする。表１を概観するとわかるように、多数の神々の名が挙げられている部分の多くは省略もしくは簡略化されている。

別天つ神の出現の部分では、アメノミナカヌシノカミのみが登場しており、また、神世七代の部分では、イザナギノミコトとイザナミノミコトの名のみが見える（Ａ－①）。国生み・神生みの部分では、「日本の島じま」「海、風、木、山、野の神がみ」との簡潔な紹介のみとなっている（Ａ－⑥）。やけどに苦しむイザナミの排泄物等から生まれた神々、妻を失ったイザナキの涙から生まれた神、火神が殺される場面で生まれた神々についても言及はない（Ａ－⑧⑨⑪）。イザナミの遺骸から生じた雷神については、八種であることについては触れられているが、名については省略されている（Ａ－⑬）。イザナミの別名や黄泉つひら坂を塞ぐためにすえられた千引の石の神名は、省略されている（Ａ－⑮）。イザナキのみそぎの場面で生じた神については、言及がない（Ａ－⑯）。

以上のように、個別の神名についてはほとんど省略されているが、アメノミナカヌシノ神のみ、名前が見えるだけでなく、イザナキとイザナミにアメノヌホコを渡して地上世界の形成を命じる神としても台詞付きで登場している。古事記では、天神諸（あまつかみもろもろ）が命じたとなっているところを、谷版は固有名詞を伴う登場人物の行為とし、台詞も加えている。抽象的な聖なる存在ではなく、〈人物〉として描くことにより、わかりやすさに配慮したものだろう。

イザナキ・イザナミの登場場面でも、独自の工夫が見られる。二神が初めて出てくる場面では、古事記は「次に、伊邪那岐神。次に、妹伊邪那美の神。」と、ただ名前を挙げているだけだが、谷版は次のように描写する。

> あるとき、そのなかのひとつから、あし草の芽のようなものが　二本　もえだして、しゅるしゅると　のび、男と女の神がうまれました。
>
> この　ふたりの神が、イザナギノミコトと　イザナミノミコトです。

上記の「あし草の芽のようなものが　二本　もえだして、しゅるしゅると　のび、」は、古事記の「葦牙の如く萌え騰れる物に因りて成りし神の名は、」を踏まえたものだろう。これはウマシアシカビヒコヂノ神とアメノトコタチノ神の出現に関わる表現だが、生命力の強さが伝わるこの形容を、イザナキ・イザナミの出現場面に用いることで、国々や神々を生み出すという大事業に取り組む二神の力強さが読み手に伝わるものとなっている。

また、イザナミから追っ手として遣わされた雷神たちを退散させた桃の実にイザナキが名をつけて感謝した部分については、谷版は採り入れている。Ⅳで詳しく述べるが、谷版では、イザナギノミコトは雷神たちにいったんは追いつかれている。差し迫った状況を切り抜ける切り札となったのが桃の実、という展開になっていることから、谷版においては、桃の実への感謝の表明としての名付け部分は、幼い読者にとっても違和感なく受け止められるものとなっていると言えるだろう。

以上のように、神々の名が連続して出てくる部分は、ほとんどか省略もしくは簡略な説明にとどめられている。一方で、主要な働きをする

神については、具体的な登場人物として描かれており、主人公の二神の登場についても印象的な描写を用いることで、そのイメージ、ここでは生命力の強さが明確に読者に伝わるような工夫が行われている。

(2) 性的な要素が含まれている箇所について。

二神がオノゴロ島に降り立った後、イザナキはイザナミに、結婚して国土や神々を生み出そうと提案し、イザナミもそれを受け入れる。この場面は、古事記では次のように記す。

> 是に、其の妹伊邪那美命を問ひて曰ひしく、「汝が身は、如何にか成れる」といひしに、答へて白ししく、「吾が身は、成り成りて成り合はぬ処一処在り」とまをしき。爾くして、伊邪那岐命の詔ひしく、「我が身は、成り成りて成り余れる処一処在り。故、此の吾が身の成り余れる処を以て、汝が身の成り合はぬ処を刺し塞ぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むは、奈何に」とのりたまひしに、伊邪那美命の答へて曰ひしく、「然、善し」といひき。

男女の体のつくりの違いに関する言及があるが、この場面は谷版では次のようになっている。

> イザナギノミコトと　イザナミノミコトは、高天原から　おりていくと、夫婦の神となって、その島で　くらすことにしました。
>
> 力をあわせて　くにづくりをはじめたふたりの神は、日本の島じまを　つくりおえると、つぎに　海、風、木、山、野の神がみをうんで、さいごに　火の神をうみました。

夫婦になったことは書かれているが、引き続き、国土を作ったこと、神々を生んだことを述べている。古事記に見られるような性的な要素は希薄と言える。子どもたちへの配慮の結果の記述と考えられよう。(B－②)

(3) 現代の価値観に照らすと差別的と受け取れる箇所。

古事記ではイザナキ・イザナミが結婚して国土や神々を生み出す場面に、現代の我々が読むと差別的と感じる部分がある。

一つは、二神の結婚の場面において、イザナミが先に声を掛けたことを良くないとする部分である。声を掛け合った直後にそのようにイザナキは発言している。(C－③) さらに、その後に生まれた子（ヒルコと淡島）は、子どもの数には入らないとされている。(C－④) そして、国生みがうまくいかないことについて、二神は天神に助言を仰ぐのだが、天神の占いの結果も、「女の先づ言ひしに因りて、良くあらず。亦、返り降りて改め言へ」というものとなっている。(C－⑤) ここからは、男性優位の考え方が読み取れる。恋愛の告白に関し、現代の若者においても男性から告白するケースの方が若干多いことを示すアンケート結果もあるとは言え[5]、子作りがうまくいかない原因を女性からのアプローチが先になったことにする、という展開は、現代の価値観とは相容れるものではなかろう。

もう一つ、最初と二番目に生まれた島を、子どもの数には入らないとしたこと、特にヒルコ（水蛭子）を「葦船に入れて流し去りき。」と述べている部分が古事記にはある。ヒルコについては、柔らかい体をもつ蛭の字が使われている。また、日本書紀神代上第五段正文に伊弉諾命と伊弉冉命が大八洲国と山川草木を生んだ後で日神・月神についで蛭児を生んだが「已に三歳と雖も、脚猶し立たず。故、天磐櫲樟船に載せて、風の順に放棄てたまふ。」との記述があ

る。同様の記述は日本書紀神代上第五段一書第二にも見える。これらのことから、ヒルコは障がい者と解されることがある[6)]。

ヒルコについては、ヒルメに対応する日の神（男神）とする説と、世界的に広く分布する洪水型の兄妹始祖神話との関連を指摘する説がある。後者は、イザナキ・イザナミの国生み神生み神話を、大洪水を生き延びた兄妹が結婚して始祖になるがインセスト・タブーに触れたためにはじめに生まれた子どもに問題があったとする神話の枠組みで理解しようとするものである[7)]。ヒルコに関しては、古事記や日本書紀に複数の異伝が見える。青木周平は、これらの異伝について、二つの系統が存在した可能性を指摘し、「記紀ひっくるめて見るのではなく、天照・日神両系のあり方を考慮すると、ヒルコの意味づけも自ずと違ったものになるといえよう。」と述べている。青木は古事記の伝承について、「近親相姦神話とよむ可能性をもつ」、「生み損じ説（蛭子）としかよめまい」とも言う[8)]。ヒルコについては完全に解明されたとは言いがたい状況であるが、古事記の記述に関しては、障がいのある子を葦舟に入れて流したと解せる記述と言えよう。

以上の、男性優位的箇所と障害者差別的箇所は、連続した場面に見えているが、谷版では前節でも引用したとおり、「イザナギノミコトとイザナミノミコトは、高天原から　おりていくと、夫婦の神となって、その島で　くらすことにしました。」と述べるにとどまっている。差別的な要素には触れない再話となっている。

(4) 苦しみや死の様子が生々しい箇所。⑦⑫

神生みの途中で火の神を生んだ際、イザナミはやけどを負ってみまかる。その場面を古事記は次のように描く。(D－⑦)

> 次に、火之夜芸速男神を生みき。亦の名は火之炫毘古神と謂ひ、亦の名は火之迦具土神と謂ふ。この子を生みしに因りて、みほとを炙かえて病み臥して在り。たぐりに成りし神の名は、金山毘古神。次に、金山毘売神。次に、屎に成りし神の名は、波邇夜須毘古神、次に、波邇夜須毘売神。次に尿に成りし神の名は、弥都波能売神、次に、和久産巣日神。此の神の子は、豊宇気毘売神と謂ふ。故、伊邪那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき。

ここでは、やけどを負って伏せったことに続き、吐瀉物や排泄物から様々な神が生じたことが記され、火神を生んだことにより死んだ、となっている。イザナミの苦しみの様が直接描かれているのではないが、その場面で成った神々が何に由来しているのかを書くことで、間接的に熱傷の苦を表している。この部分を谷版は、「ところが、たいへんなことが　おこりました。」とした上で、「火の神がうまれるとき、女神のイザナミノミコトは　大やけどをしてしまい、全身をやかれてしまったのです。そして黄泉のくにという、死者のすむくにへ　たびだってしまったのでした。」としている。

イザナミの死因と死について、簡潔な記述にとどめつつ、「たいへんなこと」という言葉によって物語が大きく転換することを読者に伝えている。

その後、死んだイザナミを追って黄泉国に赴いたイザナキは、そこで変わり果てた妻の姿を目にすることになる。この場面を古事記は次のように描く。(D－⑫)

> うじたかれころろきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右

の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき。

闇の中に浮かび上がった姿としては、体中に蛆が集りうごめき、様々な部位に雷神がとりついていたとある。この部分を、谷版は次のように描写している。

くさりかけているからだには、たくさんの虫がわいて、うごめいていました。

頭や胸、おなかなどには、死んだ　イザナミノミコトのからだからうまれた　八人のぶきみな、みにくい顔をした雷神たちが、まとわりついています。

なにがうれしいのか、足から生まれた雷神は、ぴょんぴょん　はねていました。

目をおおいたくなるような、光景です。

「くさりかけているからだ」に「たくさんの虫がわいて、うごめいて」いるという表現が、幼い読者にどの程度の現実味をもって迫るかはわからないが、この部分は古事記に沿ったものと言える。一方そのあとの雷神の描写には独自性が感じられる。「ぶきみな、みにくい顔」の雷神がイザナミの遺骸にまとわりつき、「なにがうれしいのか」「ぴょんぴょん　はねて」いる雷神もいたとなっている。具体的な描写と言えよう。この場面の絵では、生気を失った様子で横たわるイザナミの近くに張り付いた雷神を、小鬼を思わせるシルエットで描いている。

このすぐ後、イザナキは黄泉国の者たちに追いかけられるが、八種の雷神は２番目の追っ手として再登場する。物語の山場でもある追走場面の緊迫度を保持するためにも、雷神を怖い存在として描く必要があるが、テキスト、絵、ともにそのことをふまえた表現になっていると考える。

(5) 残酷な要素が認められる箇所。⑩

火神の出産により妻を失ったイザナキは、怒りのあまり、火神を殺害する。その場面を古事記は次のように描いている。(E－⑩)

故爾くして伊邪那岐命の詔はく、「愛しき我がなに妹の命や、子の一つ木に易らむと謂ふや」とのりたまひて、乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きし時に、御涙に成れる神は、香山の畝尾の木本に坐す、名は泣沢女神ぞ。

故、其の、神避れる伊邪那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬りき。

是に、伊邪那岐命、御佩かしせる十拳剣を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りき。

愛しい妻をたった一人のこどもと引き換えに失ったことを嘆く台詞、亡くなったイザナミの床の周りを這い回って泣いた様子に続き、妻を山に葬った後で火神の首を切って殺したことが書かれている。殺し方への言及が見られるところからは、イザナキの嘆きの深さや怒りの強さが伝わるものの、実の子を手にかける展開は、現代の価値観とは相容れないものと言えよう。この部分について、谷版は、

「いとしいつまよ。ひとりの子のみがわりに、だいじなおまえをなくすとは、ああ、なんということだろう。」

イザナギノミコトは、大声をあげて　なげきかなしむと、腰のつるぎをぬいて、その場で　火の神のみこを　きりころしてしまいました。

となっている。なげきかなしんだ直後に火神を切り殺したという記述から火神殺害が怒りにまかせてのことという衝動性が読み取れる点、殺し方に触れていない分殺害場面のイメージが曖昧になりやすい点に、再話の際の配慮がうか

がえると考える。

この場面の火神は、いわゆる人の形ではなく、炎の魔物的な赤いシルエットで描かれている。我が子殺害場面の表現には、残酷な要素を和らげる工夫が文にも絵にも見て取れよう。

古事記では、切られた火神からも様々な神が生じている。谷版ではその部分は省略されており、であるならば、火神殺害場面そのものを省略できたはず、という考え方もあるいはあるかもしれない。しかしながら、谷版は火神殺しに続けて次のように語っている。「イザナギノミコトのかなしみは、それでも　いえることはありませんでした。死んだ女神へのおもいは、ますます　つのるばかりです。がまんができなくなった　イザナギノミコトは　決心すると、死者のすむ　黄泉のくにへいくことにしました。」妻の死の原因を眼前から排除してなお悲しみが癒えることがなかったため、黄泉国にまで妻を追いかけていったとある。子殺しという残酷な場面を省略しなかったことにより、死者の国へ行くことが普通のことではないことが伝わりやすくなっているのではないかと考える。

Ⅳ　その他の箇所の工夫について。

子ども読者への配慮工夫が必要と考えられる箇所以外のところにみられる工夫等の主なものについて、ここでは取り上げたい。

上で、神名の列挙が省略されていることについて述べたが、ほかにも省かれているところがある。高天原から降りてきた二神が降り立った島を、古事記はオノゴロ島と伝えるが、この島名は谷版には見られない。イザナミを葬った場所についても同様で、谷版はイザナミの墓所（出雲国と伯伎国の境の比婆之山）について触れていない。子どもを含む現代の読者にはなじみのない地名を削ることが、物語展開への集中のしやすさにつながっているのではないかと考える。なお、これらの地は、現在のどこに当たるかは不明である。

一方で、現代読者にはなじみのない地名にもかかわらず取り入れられているものもある。黄泉国から戻ったイザナキがみそぎをした場所、「筑紫日向のあはぎ原」である。古事記に「竺紫の日向の橘の小戸のあはき原」とあるこの地名については、橘や阿波岐が生えている海辺の、「禊に適した聖地」の意だろうと解されている[9]。後で触れるが、谷版はみそぎの場面を光に満ちた清らかな描写をもって伝えている。「筑紫の日向の橘の小戸のあはき原」の聖なるイメージを伝えるため、それらしい描写とともに地名も採り入れたのかもしれない。

二神が地上に降り立った後の場面には、ほかにも省略されている部分がある。二神の結婚の儀式を思わせるところである。古事記では、島に降り立った二神が天の御柱と八尋殿を見立て、御柱を巡って結婚しているが、谷版ではこの部分は省略されており、夫婦として島で暮らし始めたことの言及が見られるのみである。Ⅲの(2)にて、性的な要素が含まれる部分が省略されていることについて指摘したが、オノゴロ島の名や結婚の儀式に触れていないことも、読者の関心を二神の結婚に至るプロセスに向きにくくすることにつながっているのではないかと考える。

逆に、古事記にはない具体的な描写が見られる部分もある。黄泉国の描写がその一つである。

> やみのなかを　てさぐりですすんでいくと、いよいよ　黄泉のくにに　ちかづいたのか、まわりの冷気が　身をさしてきました。（中略）
>
> と、目のまえに　氷のようにつめたい

石の引き戸がありました。
そこが、黄泉のくにのごてんの　入り口のようでした。
　イザナギノミコトが　戸のまえにたつと、石のひき戸が　すこしひらいて、なんと、あの　いとしい女神が　かおをのぞかせたのです。

黄泉国への道の暗さ寒さや、黄泉国の御殿の戸が冷たい石製であることを伝えている。さらに、イザナミが戸の隙間から顔を覗かせてイザナキに応対しているが、古事記では「殿より戸を縢ぢて出で向かへし時に」とあり、御殿の戸は閉めているもののイザナミ自身は外に出てイザナキを出迎えたと読める。谷版の、異様な暗さや寒さ、そして戸の陰から少しだけ顔を出すという出迎え方の描写は、黄泉国の不気味な雰囲気を伝えている。

また、イザナキを追いかけるヨモツシコメや八種の雷神、黄泉軍を次のように、不気味さや恐ろしさが伝わる形で描写している。

　おにたちは　おなかをすかしていたのか、その　野ぶどうの実をもぎとって、がつがつたべはじめました。
（中略）
「クエッ　クエッ。キキキギ―」
まものたちは　せまいどうくつのなかで
ひしめきあい、ふしぎな声をあげながら
われさきにおってきます。

古事記ではこれらはそれぞれ「是を摭ひ食む間に」「且、後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。」とあるのみである。

このほか、谷版ではイザナキは八種の雷神と黄泉軍に追いつかれ、刀を振るって対抗している。

　まものたちは　きみょうな声をはりあげて、せなかや頭にとびつき、足にまとわりついてきます。
　イザナギノミコトは、腰のつるぎをぬきました。そして、とりつき　まとわりついてくる　死者のくにのまものたちを、なできり　ふりはらいながら、やっと　黄泉のくにの出入り口である、黄泉比良坂にたどりつきました。

必死になって危機を乗り越えた様子が伝わる描写だが、古事記では追いつかれてはいない。刀を振るってはいるが、「御佩かしせる十拳の剣を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。」となっており、後ろ手に持った刀を振り回すという呪的行為により追っ手を防いでいる。

最後にイザナミが追いかけてくる場面でも、谷版は「ところが、ほっとしたのも　つかの間。どうくつのなかが、きゅうにさわがしくなって、こんどは、髪のけを　ふりみだした女神がおいかけてきたのです。」と、イザナミの恐ろしげな姿を描いている。古事記では「最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。」と事実のみを述べている。

谷版の、追っ手の様子の具体的描写や、イザナキが追っ手に追いつかれたとする演出により、緊迫した雰囲気が読み手につたわるものとなっていると考える。

このほか、イザナミが「今後は人を一日千人殺す」と言ったのに対し、イザナキが「それならば一日に千五百人子どもを産ませる」と言い返したあと、谷版には「イザナミノミコトのへんじは、ありませんでした。」とする一文がある。これは古事記にはないが、イザナキが言い勝ったとも受け取れる一方、生者の国と死者の国が永遠に断絶したことも伝わる部分と考える。

物語の最後、イザナキのみそぎの場面では、「あさのひかりが、川面に　きらきら　かがや

いています。イザナギノミコトは、その　きよいながれのなかに　しずかにはいって、けがれたからだを　あらいきよめたという話です。」で物語が終わっている。古事記ではここで三貴子が誕生しているのだが、Ⅱで触れたように谷版ではそこは省略されている。三貴子はこの次の神話の主な登場人物であるため、ここで誕生に触れると物語の完結性が弱まる。谷版は単独の絵本作品であるため、物語の終わりとしてふさわしい場面としてみそぎが選ばれたものと推測する。このみそぎの場を、光に満ちた清らかさをもって描写するだけではなく、聖域的な意味を含む地名も取り入れられていることについては、先に述べた通りである。

Ⅳ　まとめ

以上、谷版のテキストを古事記と比較してきた。その結果、次のような点が谷版の主な特徴としてまとめられると考える。

多くの神々の名が挙げられている部分は省略もしくは簡略化されている。性的な要素や現代の我々から見ると差別的と受け取れる要素が含まれている部分も省略されている。やけどに苦しむイザナミの様子や子（火神）殺しの場面も、具体的には描かれない。

一方、イザナミの遺骸も含めた、黄泉国、黄泉国の住人の様子には、状況をわかりやすくするための具体的な描写が加えられている。

最後の場面では三貴子の誕生には触れないことで、単独の物語としての完結性が高められている。

全般として、より幼い子ども、未就学児にもわかりやすい工夫や配慮が随所に見られる作品といえるものと考える。

注

1）原田留美、2021 年、古事記神話の再話作品のテキストについて―黄泉の国訪問神話の場合―、東京都市大学人間科学部紀要、第 12 号、11-23
原田留美、2022 年、古事記神話の再話作品のテキストについてその 2 ―黄泉の国訪問神話の場合―、東京都市大学人間科学部紀要、第 13 号、11-22

2）富安陽子文・山村浩二絵・三浦佑之監修、2017 年、絵物語古事記、偕成社
渡邉卓文監修・六七質絵・24 絵、2021 年、こんなにおもしろい日本の神話(1) 天地の始まり編 アマテラスほか、汐文社
荻原規子文・斉藤隆夫絵・三浦佑之監修、2016 年、国生みのはなし～イザナキとイザナミ～、小学館

3）谷真介文・赤坂三好絵、2003 年、黄泉のくに、ポプラ社

4）山口佳紀・神野志隆光校注・訳、1997 年、古事記、小学館（新編日本古典文学全集）

5）小島奈々恵ほか 3 名、2007 年、恋愛における告白の成功・失敗の規定因、広島大学心理学研究、6 号、71-85

6）花田春兆、日本の障害者の歴史―現代の視点から―、リハビリテーション研究、第 54 号、1987 年 https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r054/r054_002.html#D002（2022 年 10 月 16 日閲覧）

7）松本信広、1971 年、蛭児と日女、日本神話の研究、平凡社
松前健、1981 年、日本の太陽船と常世国、日本神話の新研究、桜楓社
福島秋穂、1988 年、ヒルコ神話をめぐって、記紀神話伝説の研究、六興出版

8）青木周平、1994 年、伊耶那岐命と伊耶那美命、古事記研究　歌と神話の文学的表現、おうふう

9）青木和夫ほか 3 名校注、古事記、1985 年、岩波書店（日本思想体系）、37 頁頭注

参考文献

荻原規子文・斉藤隆夫絵・三浦佑之監修、2016 年、国生みのはなし～イザナキとイザナミ～、小学館
谷真介文・赤坂三好絵、2003 年、黄泉のくに、ポプラ社
富安陽子文・山村浩二絵・三浦佑之監修、2017 年、絵物語古事記、偕成社

舟崎克彦文・赤羽末吉絵、1995 年、くにのはじまり、あかね書房
渡邉卓文監修・六七質絵・24 絵、2021 年、こんなにおもしろい日本の神話(1) 天地の始まり編 アマテラスほか、汐文社
青木和夫ほか 3 名校注、古事記、1985 年、岩波書店（日本思想体系）
小島憲之ほか 4 名校注・訳、1994 年、日本書紀（1）、小学館（新編日本古典文学全集）
菅野雅雄編著、2012 年、古事記―神話と天皇を読み解く―、新人物往来社
三浦佑之、2003 年、口語訳古事記完全版、文藝春秋
山口佳紀・神野志隆光校注・訳、1997 年、古事記、小学館（新編日本古典文学全集）
青木周平、1994 年、伊耶那岐命と伊耶那美命、古事記研究　歌と神話の文学的表現、おうふう
北川和秀、1980 年、古事記上巻と日本書紀神代巻との関係、文学、第 48 巻第 5 号、125-147
小島奈々恵ほか 3 名、2007 年、恋愛における告白の成功・失敗の規定因、広島大学心理学研究、6 号、71-85
花田春兆、日本の障害者の歴史―現代の視点から―、リハビリテーション研究、第 54 号、1987 年　https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r054/r054_002.html#D002（2022 年 10 月 16 日閲覧）
原田留美、2021 年、古事記神話の再話作品のテキストについて―黄泉の国訪問神話の場合―、東京都市大学人間科学部紀要、第 12 号、11-23
原田留美、2022 年、古事記神話の再話作品のテキストについてその 2 ―黄泉の国訪問神話の場合―、東京都市大学人間科学部紀要、第 13 号、11-22
福島秋穂、1988 年、ヒルコ神話をめぐって、記紀神話伝説の研究、六興出版
松前健、1981 年、日本の太陽船と常世国、日本神話の新研究、桜楓社
松本信広、1971 年、蛭児と日女、日本神話の研究、平凡社